

「神話」の変容と「山の神々」の伝承

—荒木飛呂彦『岸边露伴は動かない』から「富豪村」の事例—

Transformation of Myth and Folk-Literature about the Mountain Gods—Focusing on "Millionaire Village" in *Thus Spoke Rohan Kishibe* by Hirohiko Araki—

植 朗子

Akiko UE

I はじめに

民間伝承 (Volksliterature) は、神話 (Mythos)、メルヒェン (Märchen)、伝説 (Sagen) に大別されているが、この 3 つのジャンルはそれぞれが同じ関係性にあるのではない。メルヒェンと伝説は、神話という種子から生まれた 2 種類の花であり、メルヒェンと伝説に描かれているモチーフの原型は神話の中に存在する¹といわれている。

日本における神話研究、あるいは神話的物語の研究は、19 世紀にドイツ語圏ではじまったグリム兄弟 Brüder Grimm²の民間伝承蒐集を基礎におき、その後、近代の学問として発展した「神話学」³から多大な影響を受けているが、近代以降、日本だけでなくあらゆる地域において「神話」の定義や、そのバリエーションは「拡大」の一途を辿った。それは、「神」という語がひとつの意味に留まらないのと同じで、新しく生まれる数多の「神話」は、旧

¹ グリム兄弟の弟、ヴィルヘルム・グリムは、『メルヒェンの本質について』*Über das Wesen der Märchen* という論考の「伝承としての意味」*Bedeutung als Überlieferung* において、メルヒェンと伝説の源泉は、ドイツ神話 (Deutsche Myten) にあると指摘している。
Wilhelm Grimm: *Über das Wesen der Märchen*. Kleinere Schriften von Wilhelm Grimm. Hrsg. von Gustav Hinrichs. Berlin 1881, S.338.

² 兄ヤーコプ・グリム Jacob Grimm (1785 - 1863)、弟ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm (1786 - 1859)。

³ グリム以降、神話学が「近代の学問」として認知される機縁となったのは、比較宗教学者であるマックス・ミュラー Max Müller (1823 - 1900) によるものである。神話学者の平藤喜久子は、「神話学の〈発生〉をめぐって—学説史という神話—」において、ミュラーのもとで仏典の共同研究を行った南条文雄、ミュラーに指導を受けた仏教学者の高楠順次郎が、ミュラーの比較宗教学と比較神話学の研究手法を日本に伝えたと述べている。

藤巻和宏・井田太郎編『近代学問の起原と編成』勉誠出版、2014年。

来の「神をめぐる物語」という枠組みには収まらなくなっていった。

本論文では、この近代以降の「神話学」の手法を踏まえ、新しい「神話」作品における話型の分析と、古典における同一モチーフとの比較を行う。今回は、神話・伝承の中から、とくに「山の神」のモチーフに注目する。「山の神」伝承を取り上げる理由は、以下の2つの点に起因する。

- ① 「山の神」の伝承は、日本固有の古代信仰の痕跡が残存するモチーフのひとつとされており、記紀神話をはじめ、日本の説話や伝説の中に多様な話型がある。
- ② 「山の神」と古代の信仰との関係性は、日本だけでなくドイツ語圏にもみられる。近代神話学、神話・伝説・メルヒェンを対象とする民間伝承研究は、グリム兄弟が蒐集した伝承資料を対象とするものが先行しており、こういったドイツ語圏を中心とする研究を日本の神話・説話と比較することができる。

よって、本論文では、古典にみられる「山の神」のエピソードを起点に、民間伝承における「山の神」のモチーフ的特性と話型を整理し、「山の神」の神話性について論じる。また、現代において「山の神」伝承がどのような形で変成されているのか確認するために、ひとつの事例として、2012年に『週刊少年ジャンプ』に掲載された荒木飛呂彦の漫画「富豪村」⁴における「山の神」伝承を取り上げることとする。神話というカテゴリーにおいて、「山の神」はどのような特色をもち、古典から現代の間にどのような変遷をみせるのだろうか。「山の神」の神話的要素の何が今も残存しているのか明らかにする。

II 民間伝承における「神話」の定義と「山の神」のモチーフ

2.1 民間伝承研究における「神話」の位置づけとその定義

19世紀初頭、グリム兄弟はドイツ語圏とその近接する地域から膨大な数の民間伝承を蒐集し、それぞれの形式や主題に応じて、ジャンルを区分し、研究書を編纂していった。グリム兄弟の集めた資料には、完成されている物語も、未完成な断片も含められており、それらの語りの目的や特性について整理し、民俗学、神話学、伝承文学研究の礎を作り上げた。

アメリカの民俗学者ステイス・トンプソン Stith Thompson (1885-1976) は、1928年に民間説話の「タイプ・インデックス (The Type of the Folktale)」⁵を完成させ、昔話・伝

⁴ 荒木飛呂彦『岸辺露伴は動かない』集英社、2013年。この作品は1987年から集英社の『少年週刊ジャンプ』に連載された『ジョジョの奇妙な冒険』の中のキャラクターである漫画家・岸辺露伴を主人公とした作品シリーズである。岸辺露伴が漫画制作のために訪れた取材先で、奇妙な出来事に遭遇するという内容で構成されている。「富豪村」は『岸辺露伴は動かない』シリーズの「エピソード05」として、ジャンプ・コミックスに収録されている。(以下、荒木前掲書1、と表記する。)

⁵ ステイス・トンプソン著、荒木博之・石原綏代訳『民間説話—世界の昔話とその分類』八坂書房、2013年、p.151。民俗学研究、説話研究において、このトンプソンの分類がジャンル分類、話型分析の基準となっている。トンプソンはアンティ・アアルネによる Verzeichnis

説・童話・メルヒェン・英雄譚などの民間伝承⁶の形式と定義を確立させた。神話のジャンル区分についても、この中で言及しているのだが、トンプソンによると、神話に関しては、「神話」という語そのものの後天的な意味の広がりゆえに、その定義が困難になっているという。

説話の分類を表わす名称の中でもっとも困るのは神話 (myth) である。問題はそれがあまりにも久しく議論され、あまりにも多くの異なった意味に用いられてきたことにある。その論議の歴史は興味はあっても結論を導き出すものではない。⁷

このようにトンプソンは、とくに近代以降の「神話」の意味の拡大を指摘し、民間伝承における「神話」の位置づけの複雑化について述べている。そして、その問題点を踏まえた上で、神話について「現在の秩序が始まる以前に存在したと想定される世界を舞台にした説話と解釈することができよう。」と一旦定義づけ、本来の定義に立ち返り^①神々の口を通して万物の起源について語ったもの、^②人々の宗教的信仰と儀礼の実習に密接につながるもの⁸を改めて「神話」とした。

ヨーロッパ民間伝承研究者のマックス・リュートィ Max Lüthi (1909 - 1991) によると、伝説における登場人物たちは様々な危機を前に苦悩し、メルヒェンにおける登場人物たちはその危機に対してまず具体的な行動をとることからはじめる、としている。そして、神話的存在は、伝説においてもメルヒェンにおいても、「彼岸の存在」として人を救済するもの、あるいは恐怖を与えるもの⁹として登場する。

スイスの心理学者カール・グスタフ・ユング Carl Gustav Jung (1875 - 1961) は、「こころ」が神話を形成するものとして、「こころには神話の中にしか対応するものを見出せない数多くの相互関連物がある」と述べ、「無意識は相変わらず神話を産出し続けている。」¹⁰と論じた。ユングのいう「元型」と神話との関連性の指摘は、グリム兄弟が述べた「神話

der Märchentypen (メルヒェン型索引) をもとに、これを改訂・増補したものを発表した。現在、広く使用されているのは、1961年にトンプソン自身が改訂したものである。

⁶ スイスの民間伝承研究者のマックス・リュートィは著書『民間伝承と創作文学—人間像・主題設定・形式努力—』において、民間伝承 (Volksliteratur) は、「その形式に民衆が本質的に最も大きな関与をしている文学ジャンルのこと、すなわち、伝説、聖者伝説、昔話、笑話、機知、逸話そして個人的な思い出、箴言、諺と謎々、それに民謡や民衆劇のこと」を指すといい、書き記されたものではなく、本来は口伝えの形式によって伝承されたものをいう、と述べている。そして、これらの民間伝承が「人間の全体性が分裂した18世紀以降特に、繰り返し感じられ意識され、創作文学に高められてきたということは、それが必要であると信じられている一つの印なのだ。」と述べた。マックス・リュートィ著、高木昌史訳『民間伝承と創作文学—人間像・主題設定・形式努力—』法政大学出版局、2001年、p.5-6。Max Lüthi: *Volksliteratur und Hochliteratur, Menschenbild- Thematik- Fromsterben*. Bern und München 1970.

⁷ トンプソン前掲書、p.24。

⁸ トンプソン前掲書、p.24。①については、いわゆる「起源説話」を指す。

⁹ リュートィ前掲書、p.14-17。

¹⁰ アンドリュウ・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト著、濱野清志、垂谷茂弘訳『ユング心理学事典』創元社、2010年、p.87。

の原型性」と合致している。グリムの主張したこの論は「神話断片理論」と呼ばれるもので、「民間説話は神話の断片であり、その源である神話を正しく理解することによってのみ理解される。」¹¹というものであった。つまり、いわゆる神話以外の民間伝承ジャンルにも、神話的モチーフが眠っているものと考えられる。トンプソンは、この理論を以下のように解説した。

神話のかけらは草や花が生い茂った大地にばらまかれた、こなごなに割れた宝石の断片に似ている。それらを見出すものはきわめて遠くを見通す目を持った人のみである。それらの意味は現在においても感じとられ、その物語に価値を与えているし、同時に不思議なものに対して感ずる人間に自然な喜びをも十分に満足させている。(…) 作り話がしだいに洗練され、その感覚的な豊かさが増してゆくにつれて、神話的な要素は舞台裏に退き、距離という霧の中に自分をくるんでしまう。そうするとその輪郭はうすれ、代わりにその作り話の魅力は増していくのである。¹²

先行研究における「神話」の定義を踏まえると、「神話」には「信仰に関する説話」、「宗教儀礼と関係する説話」、「起源説話」¹³、「自然説話」¹⁴の種類がある。そして、伝説やメルヒェンといった他ジャンルまでをその対象とすると、「聖性を含有する彼岸の存在が登場する物語」が含まれるといえよう。実際、これらの要素を含む説話は、他ジャンルに属する場合でも神話学研究の対象とみなされる。

そして、これらの物語が、時代の移り変わりとともに本来の「神話」の姿から離れゆく中で、神話的モチーフを継承しつつも、その神話的な「核」が消失してしまう場合がある。つまり、創作メルヒェンや小説や漫画などのジャンルにおいて、その神話性を論じるためには、モチーフや話型にどれほど神話的「核」が残されているのかという検証が必要となる。よって、次節では、「山の神」を題材とする物語のモチーフと話型について論じ、神話の定義を成立させる「核」について述べたい。

2.2 日本の神話・伝承における「神」と「山の神」のモチーフ

「聖性を含有する彼岸の存在」は、記紀神話では「神」として語られている。国文学者の大野晋（1919・2008）によると、日本語の「カミ（神）」は言語学的に言えば、①雷、②虎、豹、狼などの猛獣、または妖怪、③山、を指す¹⁵という。この定義から分かるように、日本における「カミ（神）」は唯一の存在ではなく、あらゆる場所に存在するものであると考えられてきた。また、古事記などには行為までもが「カミ（神）」として描かれ、「具体

¹¹ トンプソン前掲書、p.337。

¹² トンプソン前掲書、p.336。下線は論者によるもの。

¹³ 万物の始まりや創世を主題とする伝承。

¹⁴ ミュラー学派による、自然現象の理を「神」の存在と関連づけるもの。「起源説話」と同一の意味で使用されることがある。

¹⁵ 大野晋『日本人の神』河出文庫、2015年、p.14-15。

的な姿・形を持たなかった」¹⁶ものもあり、降臨するための依り代を離れ、定住せずに彷徨もの¹⁷であるとされていたが、こういった「カミ（神）」の出現のあり方は日本の古代信仰とアニミズムとの関連性¹⁸をうかがわせる。

ここまでの大野の指摘で注目したいのは、日本語の「山」そのものが「カミ（神）」を意味するという点である。日本においては、かつて「山」自体が神格化されたものであったことが明示されており、①②③の定義において、「カミ（神）」と「場所」が直接的に結びつけられているのは、この「山」だけである。あらゆる場所に神は宿るが、「山」という場所は神の依り代ではなく、「カミ（神）」の本体を示すものでもあった。

日本の民俗学研究者である吉野裕子（1916 - 2008）は、著書『山の神—易・五行と日本の原始蛇信仰—』¹⁹において、伊勢神宮をはじめとする日本の古い祭神の起原は、「祖霊としての蛇神」にあるとし、これらの「原始蛇信仰」と「山の神」の共通性を指摘²⁰している。吉野によると、「山の神」の神格は、「蛇」（古事記）と「猪」（日本書紀）の形をとって顕われるという。蛇神を「水の神」とする日本民俗学の従来の見解では不足があり、「山」や「家屋」や「樹木」の三角形の形状を「蝮局を巻く蛇の姿」に見立て、その様子に「カミ（神）」の姿を重ねた²¹という説を提唱した。

さらに吉野は、蛇には①祖霊、②稲の守護神、③田の神、④倉の神、④穀物の神の神格が与えられており、「土」「火」「水」の3つのエレメントと関連する存在である²²と指摘している。また、もうひとつの「山の神」である猪については、易・五行との関連性から、「山」を象徴的に指し示す「西北」の方位と「戌亥」を結びつけ、猪には神性が付与された²³という点について論じている。

大野と吉野の説を併せて考えると、日本における代表的な神話である記紀では、「山」は神格化されたもののひとつであり、「カミ（神）」の姿を体現するものであった。そして、「山の神」が別の生き物や物質の形状をとって具象化されることがあるが、これらは古代の宗教的儀礼の際に、信仰の対象や祭祀のための道具として活用された。

では、ここで神話を含む日本の民間伝承に描出される「神」という存在の定義について

¹⁶ 大野前掲書、p.16。

¹⁷ 大野前掲書、p.18-19。

¹⁸ ヤーコブ・グリムは『ドイツ神話(学)』 *Deutsche Mythologie* の「寺院」Tempelの章において、自然に出来た生け垣に囲まれた部分を祭祀の場とし、聖森 Hain に神々の姿が隠されていると述べた。この自然に宿る古代の神は特定の姿をもたず、森の中を歩きまわる存在として描かれているという。これらの記述は、日本の「カミ（神）」の説明と類似しており、キリスト教が定着する以前、ドイツ語圏においてアニミズム信仰があったことを示している。Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden 2007, S. 86.

¹⁹ 吉野裕子『山の神—易・五行と日本の原始蛇信仰—』講談社学術文庫、2008年。

²⁰ 吉野前掲書、p.3-4。

²¹ 吉野前掲書、p.31-34。

²² 吉野前掲書、p.43-47。

²³ 吉野前掲書、p.111-112。なお、p.113に「山としては犬と猪は同格である。」と記されている。また、『今昔物語集』の巻31に収録されている「北山の狗、人を妻と為る語」（第15）は、白い犬の姿をした山の神が人間の女を妻としている話である。山の中に迷い込んだ男性が約束を守らずに、山の神の棲家を他の人間に話し、犬を退治しようとしたため、その男は亡くなってしまう。

確認したい。民俗学者である宮田登によると、日本における「神」と「妖怪」との関係性について、2つの先行研究を紹介している。まず、柳田國男による「妖怪が神の零落したもの」という考えを示し、それに対する否定的な説として、国文学者・小松和彦の「妖怪が神の零落したものとした場合には、まず初めに神が存在して、妖怪は存在していなかったということになる」として、神→妖怪と一元的に変化してきたという柳田の考え方に疑問を投げかけている。」ことを述べて²⁴いる。そして、「神」と「妖怪」の関係性について以下のように論じた。

この超自然的存在、もしくは靈的な存在は大きく2つに分類されている。一つは、妖怪とか魔とか呼ぶことができる。魔は、民俗社会では、人々にとって好ましい存在として判断された場合、神に転化することができるという。神に転化しなかった、つまり好ましくないとされた妖怪は、個別化された後もなお妖怪として存在し続ける。つまり妖怪が神になる場合もあるし、妖怪は妖怪のまま終わってしまう場合もあるという。一方、神の場合も、良い神は崇められるが、それに対して悪い神として妖怪化する場合もあり得る。²⁵

宮田は「日本の神には2つの面がある。」として、その両義性について説明²⁶している。

- ① 人間が神の超自然的な靈力を認め、それを鎮めようと祀り上げる。
→「祀り上げられた」神は人間に恵みを与える。
- ② 人間が祀り上げることに失敗すると、神と人間の関係性の秩序が乱れる。
→「祀り捨てられた」神は人間に厄災を与える。

つまり、神が人間にとって、善い面をみせるのか、あるいは悪い面をみせるのか、という点では、神の神格性に変化はない。しかし、悪い面をみせる神が零落した姿で描かれるようになると、その「神話」の「神」は、聖性の含有が少ないものへ変化しており、結果として本来の「神話」から「物語として変質した」といえよう。こういった変化は、時の流れが神話に大きな影響を与えた事例と考えられる。

2.3 民間伝承のカテゴリーと「神」の役割

さきほど、「日本の神」の2面性について論じたが、「超自然的存在」のもつ2面性は日本以外の民間伝承を研究対象としているトンプソンによる話型分析にも示されている。ただし、一神教の宗教を信仰する地域や民族と、日本のようにアニミズム的宗教観を示すところとでは、「神」の指すものが一致しないため、ここでは、神的存在、靈的存在、彼岸の住人と呼ばれるものを含め、広く分析の対象とする。

²⁴ 宮田登『妖怪の民俗学』ちくま学芸文庫、2005年、p.10-11。宮田の解説によると、「妖怪」という名称は新しい言葉であり、古代では妖怪のことを「物の怪」と表現していた。

²⁵ 宮田前掲書、p.12。

²⁶ 宮田前掲書、p.14。

◆複合昔話の話型とモチーフ

メルヒェンなどの複合昔話²⁷から考えると、「カミ（神）」の物語は、「超自然的敵対者」と「超自然的援助者」の話型²⁸に該当する。「超自然的敵対者」には、生贄が捧げられる「竜（蛇）」の話や、人間に死をもたらす「死神」の話が含まれる。人間に害悪をもたらす神的存在を指す。その一方で「超自然的援助者」の話型には、「小人」や「動物」など自然と結びつきの強い存在による人間への援助や、「悪魔」などの「神」とは対極にある存在からの援助、「死者」からの報恩話などがある。人間に対する「援助者」は必ずしも聖性を帯びているわけではない。「援助者＝神聖な存在」、「敵対者＝魔」とイメージしがちであるが、話型やモチーフを分析すると、人間への利益・不利益が「超自然的存在」の善悪を決定づけているのではないことがわかる。このように「敵対者」と「援助者」のモチーフは、善なるもの・悪なるものであるという線引きが難しい。

また、複合昔話には、「神々」のモチーフによる話型も示されている。さきほどの例とは異なり、こちらは善悪の区別がはっきりと明示されている。「神の裁き」、「真相の究明」、「願望の成就」、「真実の発覚」といった、登場人物の人間性や道徳観に由来する形で、「神」によって勧善懲悪的な結末²⁹が用意されている。

◆単純昔話の話型とモチーフ

伝説などの単純昔話には、伝説・言い伝えのカテゴリーに「神話的伝説」という分類³⁰がある。伝説・言い伝えは、民間伝承の他のジャンルに比べると、フィクションとしての物語と明確に区別されており、事実、実在の人物、実在の地名、歴史上の出来事など「真実性」が色濃く示されるという特性をもっている。「神話的伝説」には、天地創造に関する「起源説話」、生物の発生を示す「由來說話」、洪水や天体の関係をあらわす「自然説話」、海水の塩辛さの理由や天候の不思議などを示す「説明説話」などがある。

伝説・言い伝えのカテゴリーでは、「山」は異界の一種であり、トンプソンが研究の対象としているヨーロッパ圏の伝承においては、日本の神話のように「山」を神の姿そのものと捉えている話型は見当たらない。そのかわり、異界あるいは神的領域としての「山」が描かれる場合には、「小人」や「巨人」や「精霊」といった超自然的な存在が話の中に登場する。そして、ドイツ語圏の伝説の事例をみると、「山」は、赤髭帝・バルバロッサのような「王」や「英雄」、キリスト教伝道者である「聖人」が半永久的な眠りにつく場所として描かれている。つまり「山」は現世とあの世の境界上にある領域で、そこに留まるものたちは、人間の能力を超えた存在なのだ。人間が「山を棲家とする超自然的な存在」と遭遇するのは、彼らが人間の住む家や村に訪問する場合と、人間が「山」に踏み込んだ場合に限定される。

以上のことから、日本における「山の神」とそれに類する神話的物語は、「超自然的敵対

²⁷ トンプソン前掲書、p.38。「2つ以上のモチーフで構成されている複合形式の昔話。内容的には日本の民俗学でいう本格昔話に該当する。」という注がつけられている。

²⁸ トンプソン前掲書、p.38-74 参照。

²⁹ トンプソン前掲書、p.127-141 参照。

³⁰ トンプソン前掲書、p.217。

者」、「超自然的援助者」、「神々」のいずれかの話型からの分析が必要であると考えられる。つまり、「山の神」が人間に対して行う「行為」と、場所のモチーフとしての「山」の検討から、日本の「山の神」伝承の本質を理解せねばならない。次章では、日本の現代の作品を事例に挙げ、日本の古典的な神話との比較を行う。話型とモチーフについては、ここまで示した近代神話学・民間伝承研究の手法を用いて検討する。

III 漫画における「山の神」—荒木飛呂彦・岸辺露伴シリーズより「富豪村」

3.1 荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』と岸辺露伴シリーズ

『ジョジョの奇妙な冒険』は、漫画家・荒木飛呂彦によって1986年から2004年まで集英社の『週刊少年ジャンプ』で連載され、2005年から『ウルトラジャンプ』に連載されている漫画である。2015年12月の時点で、単行本化されたのは115巻におよび、表1に示した通り、1部(Part1)から8部(Part8)までで構成されている。この『ジョジョの奇妙な冒険』の主人公はいずれも周囲から「ジョジョ」という愛称で呼ばれている人物³¹で、それぞれが血縁関係で結ばれており、首の後ろから左肩辺りの位置にある「星の形のアザ」という身体的特徴が共通³²している。

Part1 : 『ファントムブラッド』 (19世紀イギリス。主人公、ジョナサン・ジョースター)
Part2 : 『戦闘潮流』 (1983年アメリカ。主人公、ジョセフ・ジョースター)
Part3 : 『スターダストクルセイダース』 (1987-88年日本。主人公、空条承太郎。)
Part4 : 『ダイヤモンドは砕けない』 (1999年日本。主人公、東方仗助。)
Part5 : 『黄金の風』 (2001年イタリア。主人公、ジョルノ・ジョバァーナ/汐華 初流乃)
Part6 : 『ストーン・オーシャン』 (2011年アメリカ。主人公、空条徐倫)
Part7 : 『スティール・ボール・ラン』 (1890年アメリカ。主人公、ジャイロ・ツェペリ、ジョニイ・ジョースター)
Part8 : 『ジョジョリオン』 (時代不明、日本。主人公、東方定助。)

表1 『ジョジョの奇妙な冒険』タイトル表

³¹ 作中において愛称がジョジョであることは示しながらも、別の呼び方で呼ばれている主人公も存在する。

³² 4部の主人公である東方仗助は、このアザを示すシーンが描かれていない。

1部と2部では、主人公たちが敵と戦う際に「波紋」と呼ばれる特殊能力を使うが、3部以降では、この「波紋」から派生した「スタンド（幽波紋）」という能力で戦闘するようになる。「スタンド」はそれぞれの特殊能力を人型や動物型（単体型、群体型）³³、あるいは道具型の形状をもち、これらはスタンドの持ち主の精神エネルギーが具象化したものである。なお、「スタンド」自体は「スタンド」を操る能力者（「スタンド使い」）以外には見えないが、見えない人間に対しても物理的な攻撃³⁴を与えることができる。

本論で取り上げる『岸辺露伴は動かない』³⁵は、この『ジョジョの奇妙な冒険』のスピノフ作品である。主人公である漫画家の岸辺露伴は、4部の『ダイヤモンドは砕けない』³⁶の登場人物のひとりで、「ヘブンズ・ドア」というスタンドをもっている。荒木はこの単行本において、露伴のもつ「ヘブンズ・ドア」の能力について、このように述べている。

人を本にして、その人物の人生や記録や想いを文字で読むことができ、また書き込んで操ることが可能というスタンド能力を持っています。本書は、その露伴先生の見聞録短編集です。（...）内容も舞台がイタリアから山奥から海岸まで、バラエティに富んでいる5つの不気味話がそろってくれたので、楽しんで頂けると更に嬉しく思います。

ここで収録順に『岸辺露伴は動かない』の「5つの不気味話」に登場する怪異体³⁷と、怪異体の行為とその目的、不気味の舞台、露伴の行動を整理し、それぞれの物語の展開について示す。

(1) エピソード16「懺悔室」

舞台：イタリアのヴェネツィアの教会にある懺悔室

怪異体：東洋人の浮浪者の幽霊

怪異体の行為：浮浪者に食事を与えず重労働させた若者に罰を与える。

露伴の行動：怪異体は露伴に対しては攻撃しないため、取材のみ。

³³ 原則としてスタンド能力は、1人の人間に1体という設定であるが、人型の場合も、昆虫や小動物のような形状の場合にも、単体で出現するスタンドと、同型の生き物が群れとなって出現する場合がある。

³⁴ 攻撃以外に、人の病気を治したり、怪我を回復させるなど、周囲の人間や物質に干渉することができる。

³⁵ この単行本は、『週刊少年ジャンプ』H9年30号、H24年45号、H25年46号、『ジャンプスクエア』H20年1月号、ファッション雑誌『SPUR』H23年10月号掲載分が収録されている。

³⁶ 単行本としてジャンプ・コミックスでは8-17巻までの全10巻が4部として発表されている。連載期間は1992-1995年で、2016年4月からテレビアニメ化が決定している。

³⁷ 本稿では、「霊」「お化け」「妖怪」など既存の術語との混同を避けるために、不思議な現象を起こす「彼岸の住人」や神的な存在を「怪異体」という造語で呼ぶ。なお、田中貴子『鏡花と怪異』（平凡社、2006年）によると、「怪異」とは「怪しいこと、もの」を指す。「怪異」という語は本来、怪異の主体を為すものを含む言葉であるが、その主体性をより強調し、無生物・自然界の物質・想像上の存在などを含むものとして、「怪異体」とした。

(2) エピソード 02「六壁坂」

舞台：大郷家という味噌作りで成功した一族が所有する日本の山

怪異体：山の妖怪（釜房郡平という名の男性、その娘）

怪異体の行為：恋をした相手の目の前で死に、相手に自らの死体の世話をさせる。

その後、腐らない死体となり、性交渉をして子孫を残すことを目的とする。

露伴の行動：釜房郡平に関する取材。妖怪に取憑かれそうになった際、スタンド能力によって、妖怪から自分に関する記憶を奪い、脱出する。

(3) エピソード 05「富豪村」

舞台：日本の「杜王町」という架空の町から山中に 80 数キロ入った村。

怪異体：山の神

怪異体の行為：マナーを守った人間に富を与え、無礼をはたらいた人間には、その山中の村に留まることを許可しない。山の神のマナーに関するテストに再挑戦を申し出た人間には、破ったマナーの数だけ大切なものを奪う。

露伴の行動：富豪村の別荘地を購入しようとする女性編集者の付き添いとして取材に訪れる。山の神の執事である少年を「ヘブンズ・ドアー」の能力で操り、山の神に攻撃されている女性編集者を救出する。

(4) エピソード 06「密猟海岸」

舞台：日本の「杜王町」という架空の町にあるクロアワビの漁場

怪異体：神々の食べ物である「クロアワビ」（※ある難病の薬となる）

怪異体の行為：密猟者に張り付き、重石となって、密猟者を海底に沈めて殺害する。

露伴の行動：密猟者となったスタンド使いの料理人トニオを援護し、アワビの天敵である蛸を「ヘブンズ・ドアー」の能力で操り、クロアワビを獲得する。

(5) 「岸边露伴グッチへ行く」

舞台：イタリアのフィレンツェ郊外にあるファッションブランド「グッチ」の工房

怪異体：露伴の祖母の形見にあたる、ファッションブランド「グッチ」のバッグ

怪異体の行為：お金や貴金属などをバッグに入れるとそれを消してしまう。ただし、バッグの持ち主が危機に陥った場合に、それらの金銭に類するものが、失われた価値と等価の分だけ、持ち主に還元され、持ち主を助ける。

露伴の行動：置き引きの被害に遭遇した際、バッグが生み出す「富」能力によって救われる。

このように『岸边露伴は動かない』シリーズでは、露伴はあくまでも怪異体の直接的な敵対者として描かれてはいない。いずれの話においても、露伴は怪異の取材、あるいは怪異を対峙する人物の付き添い者の位置におり、「動かない」というタイトルの通り、露伴は状況が悪化するまでは、目撃者として振る舞う。また、これらの 5 つの物語はエピソード番号順に並べられているのではないが、モチーフが連想形式で並べられている。

「懺悔室」の人間に取憑く幽霊	／	幽霊の意志（復讐）	
「六壁坂」の人間に取憑く妖怪	／	妖怪の意志（恋愛）	／ 山という舞台
「富豪村」の山の神々	／	神々の意志＝自然のルール	／ 山という舞台
「密猟海岸」の神々への食べ物	／	神々の意志＝自然のルール	／ 海 ³⁸ という舞台
「岸部露伴グッチへ行く」における「等価交換」のルール ³⁹			

表 2 『岸部露伴は動かない』モチーフ連想表

モチーフの連想表から確認すると、5つの物語の展開のうち、「神々」と「自然」という主題が提示されるのは、「富豪村」のエピソードからである。怪談的要素を含む伝説である1・2話目に対して、「富豪村」からは神話的要素が挿入されることになる。

3.2 岸部露伴シリーズ「富豪村」におけるモチーフ

「富豪村」の物語は、露伴が打ち合わせ中に、ある女性編集者から別荘地の購入の相談をもちかけられることから始まる。道がない山奥にある別荘地は、11軒の豪邸が立ち並び、ここに住む富豪のためだけに伊勢丹デパートが出店しているという異様な村である。

この村の最大の特色は、「25歳でこの村の土地を買った人物は、その後かならず大富豪になる」という点にある。そして、25歳になったこの女性編集者は、露伴に別荘地購入の付き添いを依頼する。大富豪だけが住む800坪の土地が300万という安値で売り出されている奇妙な別荘地に、露伴は取材に向かうことになる。この別荘地は「山の神」の所領地で、25歳のふつうの若者が、「山の神」が提示した「マナーの試験」を受け、それに合格したもののだけに富が与えられる。

荒木飛呂彦は『荒木飛呂彦の漫画術』において、「富豪村」の例を挙げて、漫画の書き方を指南しているが、ここで「富豪村」のテーマは「マナーの戦い」⁴⁰であると述べている。「マナーに関するバトル漫画」というアイデアは、荒木が実在の観光地を訪れた際に、別荘地の住人たちが出没する猪の駆除を猟友会に依頼したという話を偶然に耳にし、「山奥を別荘地とすることを選んだ人間が、山の生き物を殺害すること」の傲慢さを描こうとした⁴¹ことが機縁となったという。そのため、「富豪村」の扉絵では、「自然への敬意」⁴²の表象として、露伴のまわりに6羽の小鳥を描き、背景に滝が配置された。

³⁸ 山という舞台と対極にある場所。対比的に使用されている。

³⁹ 「等価交換」のルールを発現させるのは、グッチのバッグであるが、「富豪村」では神への敬意に対して富が、「密猟海岸」では盗みの罪に対して死が、等価交換的に与えられる。

⁴⁰ 荒木飛呂彦『荒木飛呂彦の漫画術』集英社新書、2015年、p.248。（以下、荒木前掲書2、と表記する。）一般的に「バトル漫画」ジャンルでは、マナーを巡って戦うことはない。

⁴¹ 荒木前掲書2、p.248-249。

⁴² 荒木前掲書2、p.274-275。



図1 「富豪村」の扉絵⁴³

こうして、露伴は自然への敬意を抱きつつ、「山の神」と戦う。作者である荒木自身の意図と、「富豪村」の物語の展開とキーワードを確認すると、「富豪村」には、以下の特色がみられ、「山の神」すなわち「自然」と人間との関係性が浮かび上がってくる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①「土地（自然）の意志」＝「自然に敬意」のない者へは「神の罰」が与えられる。 ②「自然への敬意」＝「マナー」の試験によって試される（難題）。 ③「マナー」の試験＝人間の生活上のマナー。現代社会的なルール。 ④「マナーに寛容はない」＝敬意を失した人間が赦されることはない。 ⑤「神からの恩恵」＝富と成功。 ⑥「神の罰」＝大切なものを失う。 ⑦「大切なもの」＝試験を受けた者が大事だと感じる他者の「生命」。 |
|---|

表3 「富豪村」の展開とキーワード

⁴³ ©LUCY LAND COMMUNICATIONS/集英社。荒木前掲書1、p121。

この表3のキーワードに対して、民間伝承研究の手法から、「富豪村」の構成とモチーフの特性について整理し、内容を比較する。

- | |
|--|
| ① 女性編集者が富豪になるために別荘の購入を希望する→「運」のモチーフ ⁴⁴ |
| ② 11人の富豪+12人目の富豪を夢見る女性→「累積譚」 ⁴⁵ のモチーフ |
| ③ 女性編集者と露伴が「富豪村」へ足を踏み入れる→「他界への旅」 ⁴⁶ のモチーフ |
| ④ 「山の神」の試験の場である屋敷の門が開く→「他界への旅」のモチーフ |
| ⑤ マナーを3つ破った段階で試験が不合格となる→「難題と探索」のモチーフ ⁴⁷ |
| ⑥ マナーが3回試される→「累積譚」、「連鎖譚」 ⁴⁸ のモチーフ |
| ⑦ マナーを破った女性編集者に罰が与えられる→「神の裁き」のモチーフ ⁴⁹ |
| ⑧ 実母、婚約者、小鳥、女性編集者が死ぬ→「累積譚」、「連鎖譚」のモチーフ |
| ⑨ 「山の神」の執事である少年を露伴が攻撃→「願望の成就と懲罰」のモチーフ ⁵⁰ |

表4 「富豪村」の構成とモチーフの特性

◆「運」と「累積譚」

トンプソンは「運」が「神」あるいは「王」から与えられる例を挙げ、「運」のモチーフについて、このように述べている。

人生において説明出来ないことがいかに多いか、価値のないものに過剰の報酬が与えられたり、人々が不当の苦労や災難に会うことがいかに多いかという面について昔話では運命の作用と説くのが普通である。⁵¹

「富豪村」は「運」＝幸運の獲得がテーマである。山の神から富を与えられた11人の富豪と、その幸運を自分の身にも望む12人目の人物が描かれている。「累積譚」とは、本来は会話の中で同じ言葉が繰り返され、内容は繰り返されるうちに次々と大きなものになっていく、というものである。それに対して「連鎖譚」とは、単純に同じ出来事が反復される。「富豪村」は会話の反復がなされるわけではないが、幸運を授けられる人物が繰り返し語られる点と、マナーの違反が繰り返し行われる点、マナー違反者が大切にしている「他者の命」が繰り返し失われる点において、累積譚・連鎖譚の一種であるといえよう。

◆「他界への旅」、「神の裁き」のモチーフと「富豪村」の神話性

本論のねらいのひとつとして、現代の漫画作品である「富豪村」に神話性がどのような

44 トンプソン前掲書、p.135-139 参照。

45 トンプソン前掲書、p.212 参照。

46 トンプソン前掲書、p.141-143 参照。

47 トンプソン前掲書、p.106-108 参照。

48 トンプソン前掲書、p.215-216 参照。本来は「言葉遊び」的な反復によって表現

49 トンプソン前掲書、p.127-130 参照。

50 トンプソン前掲書、p.130-131 参照。

51 トンプソン前掲書、p.135。

形で継承されているのかを明らかにする、と述べた。神話性、すなわち「神話」本来の定義に立ち返ると、この「富豪村」に登場する「山の神々」の聖性について論じる必要がある。民間伝承の舞台の多くには、現世に対して「他界」が配置されており、神話の舞台は神々の領域に他ならない。現世と他界が水平関係にあるのか、それとも垂直関係にあるのかは、物語の発生したその時代、その地域の宗教的概念によって異なる。

「富豪村」は、普通の都市部から隔絶され、人間が通常使用している道路や交通機関が発達していない山中に位置している。また険しい山上にあるという点で、現世よりも天空に近い場所に位置している。ルーマニアの宗教学者ミルチャ・エリアーデ Mircea Eliade (1907 - 1986) は、神と天空の関係について以下のように論じた。

天空構造をもつ最高神の歴史は、全人類の宗教史を理解するに重要な意味をもつ。(…) 天空構造をもつ最高存在は、その信仰崇拝からしだいに消え去る傾向をもっている。それは人間から<遠ざかり>、天に帰ってゆく、そして閑な神 (dei otiosi) となる。いわばこの種の神は宇宙や生命や人間を創造しおわって、一種の<倦怠>を感ずる。⁵²

少なくとも「富豪村」の「山の神」は、人間に富を与えるという形で人間との関わりをもち続けている。「富豪村」の「山の神」は最高神であるという確証は示されていないものの、その神格性において合致する部分がある。「信仰崇拝からしだいに消え去る傾向」、これは「山の神」にまつわるこの奇妙なエピソードを知る人間がそれほど多くないことから分かる。そして、この「山の神」の能力は、正義の行使としての「神の裁き」という形であらわれている。トンプソンのインデックスには、「神は天上から見下ろして正しいものには恩恵を与え、神意に反逆する者には厳しい裁きを下す。」とされ、同時に「全能者の真意はいつも完全な正義を示している。」⁵³と述べられている。では、「山の神」が「完全な正義」を示したのならば、なぜ露伴は神の意志に反し、そこから脱出することができたのか。

⁵² ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫訳、『聖と俗』法政大学出版局、1983年、p.112。

⁵³ トンプソン前掲書、p.127。

3.3 神的存在と超自然的能力者の差異—「山の神」と露伴



図2 「山の神」の執事を攻撃する岸辺露伴とスタンド「ヘブンズ・ドアー」⁵⁴

この絵は「山の神」の執事である少年を露伴がスタンド攻撃している様子である。露伴の上部に出現しているのは、露伴のスタンド「ヘブンズ・ドアー」で、このスタンドの能力の特性を示す漫画製作用のペンが、スタンドの右手に握られている。攻撃を受けた執事は、顔面の中央部が裂け、その部分が本のページになってしまう。このページには、執事の役割、執事の思考、執事の記憶が示されており、ここに露伴が文字を新たに書き込むと、執事はその文字の通りの行動をとらざるを得なくなる。

⁵⁴ ©LUCY LAND COMMUNICATIONS/集英社。荒木前掲書 1、p154。

ここで、「富豪村」における登場人物を改めて確認し、それぞれの能力について示す。

- (1) 「山の神」：姿を人間の前にあらわすことはない。
- (2) 「山の神」の執事：少年の姿。神の意志を伝える者。普通の人間で特殊能力なし。
- (3) 25歳の女性編集者：12人目の富豪を夢見る女性。3つのマナー違反のため、母・婚約者・助けようと保護した小鳥という3つの生命を奪われる。
- (4) 岸辺露伴：スタンド使いと呼ばれる特殊能力者。「山の神」の罰を無効化するために、「山の神」の執事を攻撃し、「山の神」の怒りを買うことなく現世に帰ることができる。
- (5) 11人の大富豪たち：直接的には登場しないが、「山のルール」を守った成功者として紹介されている。「山の神」が単なる乱暴な存在ではなく、実際に富を与えられた人物がいるという提示。

つまり、「富豪村」の物語は「神」と「特殊能力をもつ人間」の戦いである。11人の富豪は「善なる人間」であり、社会的規範にのっとる性質によって神から恩恵を受ける。そして、12人目の女性は「マナー」という些細なルールすら守れない「つまらない人間」として、神から罰を与えられる。これはトンプソンのカテゴリーによると、複合昔話ジャンルの「神々」の項目にある、「願望成就と懲罰」のモチーフである。「富豪村」はこの複合昔話の話型を踏襲していることがわかる。

◆「願望の成就と懲罰」のモチーフと「真の悪」

トンプソンの「願望成就と懲罰」のモチーフの解説には、「昔話のよい語り手の1つの目標は悪が当然の罰を受けるのを見とどけることである。真の価値のないもの、または邪悪の行為を見破ることは必ずしも容易ではない。」と述べられている。「富豪村」の「山の神」は女性編集者に重い死の罰を与えるが、これに対して露伴は反論する。

「このまま帰れるわけがない！頼む彼女を許してやってくれ。彼女は純粋に幸せになりたかっただけだ…。ぼくのために取材になれば良いと思ったのも…編集者としての本心だったはずだ…。」⁵⁵

⁵⁵ 荒木前掲書 1、p.159。

近代以前の民間伝承において、「願望成就と懲罰」のモチーフをもつ物語の多くは、神や聖者を「歓待したか否かによって褒美が与えられる」⁵⁶かたちで話が展開する。そして、これらの物語は、「奇跡譚、信仰伝説、滑稽譚、が結合したもの」⁵⁷とされている。「願望成就と懲罰」のモチーフの滑稽さとは、懲罰の種類が馬鹿馬鹿しい内容のものが多々みられることに起因する。

しかし、「富豪村」では、神から課せられた課題は、「食事」や「訪問」の際のマナーという極めて現代社会的なものである。社会生活上のマナーの中で、「来客が座る席の上座・下座の位置関係」、「畳の縁を踏まない」、「お茶を飲む時のカップを持ち方」⁵⁸といったルールは、ともすれば滑稽なものであるにも拘らず、神に与えられた懲罰は深刻なものである。「課題」と「罰」の深刻さが入れ替わる点が特徴的であり、「富豪村」における「神」のこういった不条理さが、「神」のルールに対する反論の起点となる点で、現代的要素を含んでいるといえよう。

◆「難題と探索」のモチーフと「人間讃歌」

荒木飛呂彦は、「富豪村」を母胎となった漫画『ジョジョの奇妙な冒険』のテーマを「人間讃歌」としている。

何かの困難に遭ったとき、それを解決し、道を切り拓いていくのは人間の力によるのであって、そこで急に神様が来て助けてくれたり、魔法の剣が突然落ちてきて、拾って戦ったら勝ってしまった、というような都合のいい偶然は、『ジョジョ』では決して起こりません。⁵⁹

「富豪村」で露伴が戦う敵は「神」であり、「神」から与えられる課題やその後の展開は、民間伝承における「難題と探索」のモチーフである。トンプソンの定義では、このようになっている。

多くの民間の昔話の筋の中で目立つ事件は難題、時にはまったく不可能な仕事の遂行及び探索旅行である。しかしそういう課題は話の従属的な一部分を占めるに過ぎない場合が多い。それに対して難題や探しものの解決が全体を通じて主要な事件となっているような話もいくらかある。⁶⁰

「富豪村」における「難題を解決するための旅」は、露伴と女性編集者が「山の神々」

⁵⁶ トンプソン前掲書、p.131。ここで紹介されている具体的な昔話は、キリストと聖ペテロが普通の人間の姿で地上を遍歴していた際に、ある家では宿を拒まれ、ある家ではもてなしを受ける。そして、神と聖者に対する行為によって、褒美と罰が決定されるという内容である。

⁵⁷ トンプソン前掲書、p.131。

⁵⁸ 「富豪村」の中で、実際に女性編集者が侵したマナー違反の例。

⁵⁹ 荒木前掲書 2、p.221。

⁶⁰ トンプソン前掲書、p.106。

の領域へ足を踏み入れることであり、課せられる「難題」は、「気をつけていても侵してしまう無意識のルール違反」と、その罰として与えられる「死」からの脱出である。トンプソンは「探索」の物語に、日本の伝承である『昔話集成』の「宝化物」、「化物寺」、「化物問答」を紹介し、これらを「化物を恐れない男」の話型⁶¹としている。他にも「瘤取りじいさん」のように、鬼と対峙する老人男性の昔話も、この話型に含まれる。しかし、露伴が対峙するのは、鬼や化物ではなく「神」である。

実は案内役の男の子は直接の敵ではなく、その背後にいるのは山の神々です。「そんなの敵にまわして、どうするんだよ」と描いている僕自身も思いながら、どうしたら勝てるのか、というところでは、マナーに則って勝つ、というルールはけっして外せません。(…)露伴の勝利がどんなに難しくても、ここで誰かが突然助けにきたり、女性編集者に超能力が目覚めたり、山の神が出てきて「おまえはいいヤツだから許すよ」というような展開は絶対いけません。「人間讃歌」というテーマで漫画を描いていますので、あくまで自分の力で切り拓く、ということが重要なのです。⁶²

荒木自身の解説にあるように、「富豪村」の最大の特徴は、古い民間伝承の話型や神話的モチーフを含み、それを踏襲しつつも、登場人物たちの思考や性格が生き生きと描かれているところにある。どこの誰だかわからない人物が、民間伝承の話型に乗っ取って、決まった結末に流されていくのではなく、「個人の意志」がはっきりと明示されている点が、荒木飛呂彦の示す「新しい神話」のかたちであり、「人間讃歌」としての物語性である。

IV おわりに

本論では、近代の学問としての「神話学」の流れをうけ、その後の民間伝承研究に新しい視点を取り入れたスティス・トンプソンによるモチーフ・話型分析の手法から、作品を論じた。現代の漫画の事例として、荒木飛呂彦の『岸边露伴は動かない』に収録された「富豪村」の話に注目し、そこに登場する神的存在と、近代以前の伝承における神的存在との比較を行った。

比較するうちに、「富豪村」の中に近代以降の民間伝承研究で明らかにされてきたモチーフや話型が数多く用いられていることが明らかになった。漫画はある種の「ファンタジー」で、ありえない展開が含まれる作品が存在することもあるが、「富豪村」では話型のルールを損なうことなく、そこに新しい展開と、新しい「神話」の意義が付与されていた。

畏怖の対象であり、この世の絶対的なルールを司る「神」の特性はそのままに、「富豪村」ではその「完全なる存在」に、不完全な人間が立ち向かい、自らの意志によって運命を切り拓いていく。この「富豪村」は、古典的なモチーフと話型をこれまでにない組み合わせで用いることによって生み出された「新しい神話」であるといえよう。

⁶¹ トンプソン前掲書、p.108。

⁶² 荒木前掲書 2、p.271。

参考文献

(1)

- ・荒木飛呂彦『岸部露伴は動かない』集英社、2013年。
- ・荒木飛呂彦『荒木飛呂彦の漫画術』集英社新書、2015年。
- ・大野晋『日本人の神』河出文庫、2015年。
- ・田中貴子『鏡花と怪異』平凡社、2006年。
- ・藤巻和宏・井田太郎編『近代学問の起原と編成』勉誠出版、2014年。
- ・吉野裕子『山の神一易・五行と日本の原始蛇信仰一』講談社学術文庫、2008年。

(2)

- ・Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994.
- ・Brüder Grimm: *Kinder- und Haus- märchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.
- ・Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden 2007.
- ・Leander Petzoldt: *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*. München 1995.
- ・Max Lüthi: *Volksliteratur und Hochliteratur, Menschenbild- Thematik- Fromsterben*. Bern und München 1970.
- ・Wilhelm Grimm: *Über das Wesen der Märchen*. Kleinere Schriften von Wilhelm Grimm. Hrsg. von Gustav Hinrichs. Berlin 1881.

(3)

- ・アンドリュー・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト著、濱野清志、垂谷茂弘訳『ユング心理学事典』創元社、2010年。
- ・ステイス・トンプソン著、荒木博之・石原綏代訳『民間説話—世界の昔話とその分類』八坂書房、2013年。
- ・マックス・リュートイ著、高木昌史訳『民間伝承と創作文学—人間像・主題設定・形式努力—』法政大学出版局、2001年
- ・ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫訳、『聖と俗』法政大学出版局、1983年。

*本論文で使用した『岸部露伴は動かない』の画像(図1・2)は、著者の荒木飛呂彦氏ならびに株式会社集英社、そして集英社ウルトラジャンプ編集部の『ジョジョの奇妙な冒険』担当編集者・山内智氏、集英社広報部・村木氏のご厚意により、使用させていただいた。

*本研究は、神戸大学国際文化学研究推進センターにおいて、2015年度研究プロジェクト助成を受け、その研究成果の一部を取りまとめたものである。